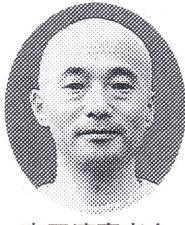


懐中電灯とラジオ 各部屋に常備を

吉田清彦さん地震体験記



吉田清彦さん

本紙の「料理のカラクリ」を執筆しているフリーライター吉田清彦さんは神戸市灘区に在住、戦後最悪の死者を出した阪神大震災の直撃を受けた。その吉田さんから地震発生後の体験記が届いた。

私の住むアパートは、一階の時もズボンに靴下姿のま階の柱の一本が折れ、他の柱も激しい横揺れのためにマフラ、時計、それに財

沈下したが、からくも倒壊は免れた。ただ、まだ日に何度かは余震があるので、思考を集中させるのに苦労する。今は玄関のガラス戸を開けたままにし、玄関口の手前の戸も閉めずに、寝

布、貯金通帳をポケットに入れたコートをかぶせて、すぐに逃げだせる体勢で床

についている。地震が起きた時、最初は本棚を押さえよつとした

が、揺れの激しさでそれどころではないことが分か

ガスの元栓まず締めて 保存食の必要性を痛感

り、まずは身の安全確保をと、柱にしがみつき、ガスの元栓を閉めなくてはと気づく。はうようにして元栓を締めたが、ともかく「どうしよう。どうしたらいいの」と思いあぐねているうちに時間が経ってしまった。

二日目の夜中に、この一帯だけが奇跡的に電気が復旧したので、何とかご飯だ

た携帯ラジオも同様に本の中に埋もれてしまい、行方知らずである。暗がりの中でへたに動く割れ物で足を切ったり、倒壊物に当たってけがをすることを考えて、ともかく夜明けを待つことにした。

寒さをしのぐために、手

近の衣類をたぐり寄せて腰に巻きつけて時を過ごすうちに、腹がすいていることに気づき、買い置きのあることを思い出して夜明けを待った。

二日目の夜中に、この一

帯だけが奇跡的に電気が復旧したので、何とかご飯だ

た。今回の体験から緊急時への備えを二、三アドバイスするとすれば、まず懐中電灯と携帯ラジオ、それに乾電池を各部屋ごとに常備しておくこと。一カ所だけだと、部屋がつかれたら、たどりつけないことがある。

次に水、乾パン、缶詰類、それにチョコレートやナツ

ので、顔を洗ったり、トイレを流すことには、当分困らない。飲み水や料理に使う水は、普段から空きビン五本にくみ置いていた水道水が一本分だけ割れずに残っていたので、二日間はその水をなめるようにして飲んだ。水が尽きかけたので、ふるの水を飲むのかと思っ

たが、街へ出たら、水道管の継ぎ目が外れて、水があらふれていた。助かったと思いき、すぐに家に帰り、洋酒の空きビンを持ってきてもらい水を注いだ。あとはガスだが、全面復旧に一月半かかるらしい。これはじつはたしても始まらない。

今回の体験から緊急時への備えを二、三アドバイスするとすれば、まず懐中電灯と携帯ラジオ、それに乾電池を各部屋ごとに常備しておくこと。一カ所だけだと、部屋がつかれたら、たどりつけないことがある。つまり普段から窮乏生活に慣れていることが必要かもしれない。

今回の体験から緊急時への備えを二、三アドバイスするとすれば、まず懐中電灯と携帯ラジオ、それに乾電池を各部屋ごとに常備しておくこと。一カ所だけだと、部屋がつかれたら、たどりつけないことがある。つまり普段から窮乏生活に慣れていることが必要かもしれない。